

關係

岡嶋
晴香

目の前でくずおれた男に、対して女は、ただその旋毛をぼんやりと眺めていました。その放心しきった顔は、けれどどこか哀しげで、どこか怒りが込められているようでした。

「……なぜ」

先に口火を切って落としたのは、やはり女です。結局いつもそうだったと、女はひっそりと思いました。この目の前で項垂れる男は、どうしようもない男は、いつもこうなのだと言女は溜息をつきます。そしてそんな男を切り捨てられない今までの自分にも、溜息をつきました。

「何故？」

幾分か落ち着きが戻った声で、女は再び男に問いました。男はひとつ身動きすると、ちらりと女の顔を窺います。それに気付いた女は敢えて口を真一文字に結ぶと、珍しい女の顔に動揺したのか男は再び視線を落としました。

ここで折れては何も変わらないと女は、きつくきつく口を結びます。漏れ出そうになる甘言を、牛が草を食むように奥歯でぐちゃぐちゃにすり潰し、吐き出すことなくしっかりと飲み干します。甘やかすのは終わりです。

もう、ここで終わらせねばならないことを、女は百も承知なのです。

「……いいえ、引き伸ばしすぎたのかもしれないわね」

女の小さな呟きは、しかし男には輪郭を持たないまま伝わったらしく。男が救いとばかりに顔を上げますが、やはり変わらぬ女の顔に諦めたのか慄いたのか、どしんと地面に一層体を沈めました。男の視界は女の足元を映すのみです。

しばらく、二人の間に沈黙が流れました。男はなおも女の言葉を待っている風でしたが、とうとう耐え切れず、減多に動かさない唇を重たそうに開きました。

「……すまない」

「いいえ、謝罪はいらないわ」

びしゃりと返す女に、男はまたしても動揺し、肩を大きく揺らしました。それでも女の纏う異質な空気をようやく理解したのか、女の甘言を待つことはやめたようです。

「俺は、あんたが、いなければ」

「何故、あの時に気が付かなかったの」

「それは、その……」

「私は言ったのに」

たどたどしく言葉を紡ぐ男に、女は拳を握りこみました。握りこまれた左手の中で、硬くて冷たいものが、薬指に食い込みます。女はその異物の感触に、さらに口を結ぶしかできませんでした。

目の前にいるどうしようもない男は、もうなにもかもが遅いのです。

「俺は、あんたが居なくては、生きていけない」

女はスツと目を細めます。男は変わらず女と目を合わせません。再び二人に降り注いだ沈黙は、けれど今度は、女が背を向ける覚悟を固めるに相応しい重さでした。

「ま、待ってくれ！」

「出てって。ここは貴方の家じゃない」

「そんな！」

「ここは私と、私の家族の家よ。貴方の居場所はないの」

「お願いだ！ 俺は、もう、お前がいないと生きてはいけない！」

女は男を振り切るように、家の敷地の中へと入ります。ギイという音を鳴らしながら、腰上の高さまである門を閉めると、追いつがってくる男にピタリと視線を合わせながら見下ろしました。

「私は言ったわ。母さんが死んだとき、その葬式の日、確かに言ったはずよ」

「そ、それは」

「貴方は、わかったと言った」

「そうだが……だ、だが」

どもりながらも尚言葉を紡ぐ男を尻目に、女は、家の窓へと視線を巡らせます。薄いカーテン越しに、大小二つの気配が心配そうに佇んでいるのがわかりました。

女は無意識に左手の親指で、薬指にはまる銀色を撫でました。そして少し目を伏せ閉じると、勢いをつけるように玄関へと飛び込みます。

家の内側から扉の取っ手に手をかけると、醜聞も厭わずコンクリートへ座り込み、スチール製の閉じられた門に縋りつく男へ、最終宣告を下しました。

「もう二度と、私と私の家族の前に現れないで。貴方は一人で生きていきなさい」

「ど、どうやって」

「知らないわ」

それだけ言うと、女はボタンと扉を閉めます。家の外に取り残された男の、どうしようもない男の、どうしようもない言葉を扉で挟みました。

「待ってくれ！……姉さん！」

姉は外に叩き出した、先程までは弟であつた男の言葉に溜息をつく、サンダルを少し乱暴に脱ぎ捨てて、我が家へと上がりました。そこに、娘を抱き上げている夫が心配そうに、リビングから顔を出しました。なんと声を掛ければ良いのか悩んでいる夫に、妻は、愛しい家族へ安心させるように微笑みます。

「いいのよ。私は言ったもの。これからもう、ニートじゃ生きていけないって」